

# ブラフマースートラバーシュヤのプラーナ説 —チャラカ・サンヒターのプラーナ説との比較検討—

長友泰潤

哲学研究室

2011年10月13日受付; 2012年1月26日受理

## On the theory of Prāṇa in Brahmasūtrabhāṣya

Taijun Nagatomo

Laboratory of philosophy, Minamikyusyu University,  
Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan

Received October 13, 2011; Accepted January 26, 2012

In the theory of the Śāṅkarabhāṣya (SBh), Śāṅkara's commentary on Brahmasūtra, vāyu (or prāṇa) has three meanings, namely, the ten ordinary organs, the internal five winds and the god of wind. Vāyu the internal five winds come into the Self and divide into five parts. Each of which has a special quality. These parts are sometimes individually called prāṇa, udāna, samāna, apāna and vyāna depending on their organic function but sometimes 'prāṇa' is used as a general term for all five parts. And these five Vāyu (or prāṇa) aren't the function of the internal organs like manas and buddhi. When prāṇa goes out of the Self, the body and all the sense organs become weak. Vāyu (or prāṇa) plays an important role in the maintenance of the Self. Vāyu (or prāṇa) means the god of wind and the Brahman itself.

In the view of Carakasam hitā (CS), vāyu (or prāṇa) does not mean the ten ordinary organs and the Brahman itself., it consists of prāṇa, udāna, samāna, apāna and vyāna. And it brings the object perceived by the five sense organs and the manas to the ātman. So internal organs like the manas and the buddhi, have in common the function vāyu (or prāṇa). The internal organs are connected to the five sense organs by this function. The vāyu (or prāṇa) also plays an important role in the maintenance of the body and all the sense organs. It conserves good health, improves strength and complexion, luster, growth, and contributes to the attainment of knowledge and longevity. Outside the body, it brings about compactness and movement among the sun, moon, stars and planets, while sustaining the earth.

According to the above investigation, it can be maintained that there is some difference between the view of vāyu (or prāṇa) in the SBh and the view presented in the CS. In the CS, vāyu (or prāṇa) doesn't mean the ordinary organs and Brahman itself. The vāyu (or prāṇa) is the common function between the internal organs like the manas and buddhi, connecting these internal organs to the five sense organs. In the view of SBh, vāyu (or prāṇa) does not indicate the functions of the internal organs. In the view of the SBh, these internal organs can't connect to the five sense organs, if they themselves already have this function.

Key words: epistemology, Manas, prāṇa, Śāṅkara.

## 序 論

本稿では、シャンカラのブラフマースートラ（以下BS）に対する注釈書ブラフマースートラバーシュヤ（以下BSb）<sup>註1)</sup>における風（ヴァーユ）や生氣（プラーナ）についての見解を詳細に検討する。そして、その概念

や用法を検討することによって、器官、個人の生氣、宇宙的氣息という三つの用法の存在を明らかにし、それぞれの意味について考察する。さらに、以前から研究対象としてきた、インド医学論書であるチャラカ・サンヒター（以下CS）の風・生氣についての解釈と比較考察し、これらの学説におけるプラーナ（生氣）や風（ヴァーユ）の意味について解明していく。

## 1. BSb における風（ヴァーユ）や生氣（プラーナ）

BSb における風（ヴァーユ）や生氣（プラーナ）についての言及をもとに、その概念、用法を考察すると、これらの言葉が、三つの異なる意味を持つことがわかる。すなわち、器官、個人の生氣、宇宙的氣息（ブラフマンと同義の場合もある）である。

## a) 器官としての風・生氣

まず、BS ではムンダカを引用し次のように述べている。

「これ（ブラフマン）より、生氣、意、及び一切の器官（indriya）生ず。」（ムンダカ 2・1・3）  
etasmājjāyate prāṇo manaḥ sarvendriyāni ca (muṇḍ 2/1/3)<sup>注2)</sup>

これに対する BSb の注釈は次のように述べている。

「同様に一切の生氣（すなわち器官）も〔最高我より生ず。〕一切の世界、一切の神々、一切の存在飛散す。」（プリハド 2.1.20）というこのような類の・生氣の発生を説く、ここでは、〔即ちこの引用文では〕世界等が最高のブラフマンから発生するように、それと同様に生氣もまたその通りであるとの意味が述べられている。

同様に

《これより、生氣（器官）、意、及び一切の器官生ず。空、風、火、水、すべての支持者たる地が〔生ず〕》（ムンダカ二・一・三）

と、かような個所などに依っても、空等のように、生氣にも発生があると、認めねばならない。」

etasmādātmanah sarve prāṇāḥ sarve lokāḥ sarve devāḥ sarvāni bhūtāni vyucaranti (bṛ 2/1/20) ityevamṭ jātyakam / tatra yathā lokādayaḥ paramābrahmaṇa utpadyante tathā prāṇā apītyarthaḥ / tathā etasmājjāyate prāṇo manaḥ sarvendriyāni ca / kham vāyurjyotirāpaḥ pṛthiviḥ viśvasya dhārīṇi (muṇḍ 2/1/3) ityevamādiṣvapi khādivatprāṇānām utpattiriti draṣṭavyam / <sup>注3)</sup>

ここでは、生氣、この場合は器官を指すが、これが、ブラフマン（最高我）から生じるとされている。空、風、火、水、地がブラフマンから生じるように、生氣もブラフマンから生じると言う。

この器官について、BSb は次のように述べている。

「声・触・色・味・香を対象とする五つの知覚の区別があり、そのために五つの知覚器官がある。発言・執持・歩行・排泄・歡喜は五つの作業の区別で、またそのために五つの作業器官がある。しかし、意は一切のことを対象とし〔過去現在未来の〕三時に働き一つであって、多くの働きをなす。…中略…しかし、〔生氣の〕所作の種類から見て、十一という伝承が、生氣（プラーナ）に関する拠り所であると決定される。」

śabdaspārśarūparasagandhaviśayāḥ pañca buddhibhedās tadarthāni pañca buddhi-indriyāni / vacanādānaviharaṇa-utsargānandāḥ pañca karmabhedās tadarthāni ca pañca karmendriyāni /

sarvārthaviśayam traikālyavṛtti manastvekamanekavṛttikam / ……  
kāryajātavaśāttvekādaśatvāmnānam prāṇaviśayam pramāṇamiti shhitam //6//<sup>注4)</sup>

ここでは、生氣が十一の器官、すなわち、五つの知覚器官、五つの作業器官、そして意であることが説かれている。

また、BSb は次のように述べている。

「また、主要の生氣も別の生氣と同様にブラフマンの変異であると〔前経の説明を〕拡大して示す。またそれについて、〔次のように〕一切の生氣は全く差別なくブラフマンの変異であると既に説明された。すなわち、《この〔ブラフマン〕より生氣、意、および一切の器官は生ず》（ムンダカ 2・1・3）と器官を伴う意とは別に、生氣の発生が聖典に〔説かれているか〕らである。」

mukhyaśca prāṇa itaraprāṇavadbrahma-vikāra ityatidiśati / taccāviśeṣeṇaiva sarvapraṇānām brahmavikāratvamākhyātam / ‘etasmājjāyate prāṇo manaḥ sarvendriyāni ca’ (muṇḍ /2/1/3) iti sendriyamanovyatirekeṇa prāṇasyotpattiśraṇāt, <sup>注5)</sup>

ここでは、すべての生氣に差別がなく、ブラフマンの変異であるとされている。また、器官を伴う意（マナス）とは別に生氣が説かれていると言う。

また、BS は次のように述べている。

「〔生氣は〕風にも所作にもあらず。別個に教示されるが故に」<sup>注6)</sup>

これに対する BSb の注釈は次のようになっている。

「生氣は風でもなければ作具の〔共通の〕作業でもない。何故か。別個に教示されるからである。まず、《生氣はまさにブラフマンの第四の部分なり。それは風の光によりて輝き、また熱す》（チャンドーグヤ 3.18.4）と、生氣について別個に教示がある。何となれば〔生氣が〕風そのものであれば、風から別個に教示されないであろうからである。同様に〔生氣には〕作具の機能からも別個の教示がある。発声器官等の作具を枚挙した後に、それぞれに別個の生氣が枚挙されるからである。」<sup>注7)</sup>

ここでは、生氣が風でも作具の作業でもないことが、示されている。その理由として、聖典のなかに、風と別個に教示されている箇所や作具の機能とは別個に教示されている箇所があることを上げている。また、発声器官等の作具を枚挙した後に、それぞれに別個の生氣が枚挙されると言う。

## 小 結

以上の検討から、ここで言及されている生氣は、器官を指すが、これが、ブラフマン（最高我）から生じるとされている。空、風、火、水、地がブラフマンから生じるように、生氣もブラフマンから生じると言う。そしてこの生氣は十一の器官、すなわち、五つの知覚器官、五つの作業器官、そして意であるとも言わ

れる。また、すべての生気に差別がなく、ブラフマンの変異であるとされている。また、器官を伴う意（マナス）とは別に生気が説かれており、生気が意（マナス）とは別の概念を持つ存在であり、風でも作具の作業でもないことが示されている。その理由として、聖典のなかに、風と別個に教示されている箇所や作具の機能とは別個に教示されている箇所があることを上げている。

## b) 個人の生気

さらに、BSbの注釈は次のように述べている。

「まさしく、風がこの自己の中に入って五つの局面（vyūha）に別れ特殊の性質で安住しているときに、生気（プラーナ）という名で呼ばれる。〔風とは〕別の実在でもなく、ただ風だけでもない。」<sup>注8)</sup>

ここでは、風が、身体に入って、五つの局面に別れ、特殊の性質で安住しているときに、それは、生気（プラーナ）と呼ばれとされる。プラーナは風が身体に入ってから呼称であり、個人の生気を指す。

また、BSbの注釈は次のように述べている。

「また、《汝らのうち或ものが出ていく時、身体が最も悪しき状態にあるが如く見えるもの、その者が汝らのうち最勝なり》（チャンドグヤ 5.1.7）と論じて、一つ一つ言語器官等が出ていっても、ただその機能が欠けるだけで、前と同じように生命が持続されることを明示したあと、生気が出ていこうとしたときに、言語器官等が衰弱に陥り、且つ身体が崩壊が付随することを聖典は明示して、身体と器官の存立が生気にもとづくことを明示している。」<sup>注9)</sup>

ここでは、個人の生気が出ていこうとした時には、器官が衰弱し、身体が崩壊するので、身体と器官の存立に生気は欠かせない存在であるとされる。一方、器官が欠けても、その機能が欠けるだけで、生命は維持されるから、生気と器官は別物とされる。

BSでは次のように言われている。

「意における如く〔生気にも〕五つの機能が指名される。」<sup>注10)</sup>

これに対するBSbの注釈は次のようになっている。

「聖典に《呼気・吸気・媒気・上気・等気》（グリハド 1.5.3）とこのように指名されているから、また主要の生気に、独特の所作がある。そして、この機能の区別は所作の区別に依存している。呼気（プラーナ）は前方への機能で、出る息等の作業をする。吸気（アパーナ）は後方への機能で、入る息等の作業をする。媒気（ヴァーナ）はこの両者の接合において存在し、力を要する作業の原因となる。上気（ウダーナ）は上方への機能であり、〔死亡時の靈魂の〕出発等の原因である。等気（サマーナ）は身体は一切の支分に、等しく食の精髓を運ぶ。」<sup>注11)</sup>

ここでは、個人の生気の五つの機能について説明されている。すなわち、前方への機能で、出る息等の作業をする呼気（プラーナ）、後方への機能で、入る息等の作業をする吸気（アパーナ）、両者の接合において存在し、力を要する作業の原因となる媒気（ヴァー

ナ）、上方への機能であり、〔死亡時の靈魂の〕出発等の原因である上気（ウダーナ）、身体は一切の支分に、等しく食の精髓を運ぶ等気（サマーナ）といった、五つの機能である。

BSでは次のように言われている。

「また〔主要な生0気は〕微塵である。」

anuśca //13//<sup>注12)</sup>

これに対するBSbの注釈は次のようになっている。

「また、この主要の生気は、残りの生気と同様に、微塵と理解されるべきである。そしてこの場合にもまた、微塵とは、微細と限定とである。それは極微（paramāṇu）とは等しくない。〔呼気吸気等の〕五つの機能によって、全身に遍満しているからである。〔主要の〕生気は微細である。〔死に際して身体から〕出発する時に、傍らにいる人に認識されないからである。また、〔生気は〕限定されている。出発、進行、帰来が聖典に説かれているからである。」

anuśca āyaṃ mukhyaṃ prāṇaḥ pratyetavya itaraprāṇavat / aṇutvaṃ cehāpi sauśmya-paricchedau, na paramāṇutulyatvam; pañcabhirvṛttibhiḥ kṛtsnaśarīravvyāpītvāt / sūkṣmaḥ prāṇaḥ; utkrāntau pārsvasthenām-upalabhyamānatvāt / paricchinnasotkrānti gatiśrutibhyah //<sup>注13)</sup>

ここでは、主要な生気と残りの生気は微塵であるとされている。理由として、呼気等の五つの機能によって、全身に遍満していることが挙げられている。

また、BSは次のように述べている。

「それら〔十一の生気〕は器官なり。このように〔聖典に〕表示されているが故に最勝〔の生気〕よりも別である。」

ta indriyāni tadvyapadeśādanyatra śreṣṭhāt //17//<sup>注14)</sup>

これに対するBSbの注釈は次のようになっている。

「発声器官等は〔主要の〕生気とは全く別ものである。何故か。表示に区別があるからである。表示に区別があるとは何か。話題となっている諸生気は、最勝〔の生気〕を除外して残った十一の器官であると言われる。聖典において、次のように表示が認められるからである。すなわち、《これより、生気、意、並びに一切の器官生ず》（ムンダカ 2.1.3）というこのような類の場所において、生気と器官とが別々に表示されているからである。」

tattvāntarānyeva prāṇadvāgādīnīti / kutaḥ? vyapadeśabhedāt / ko ayaṃ vyapadeśabhedah? te prakṛtāḥ prāṇāḥ śreṣṭhaṃ varjayitvā avāśiṣṭā ekādaśendriyā nītyucyante / śrutāvevaṃ vyapadeśadarśanāt / 'etasamājyate prāṇo manaḥ sarvendriyāni ca' (muṇḍ 2/1/3) iti hyevaṃjātyakeṣu pradeśeṣu pṛthakprāṇo vyapadiśyate, pṛthakcendriyāni //<sup>注15)</sup>

ここでは、器官と主要の生気が別ものであるとされている。それは、聖典において、生気と器官が別々に表示されているからである。

また、BS は次のように述べている。

「また特徴の違いがあるが故に。」

vailakṣaṇyacca //19//<sup>注16)</sup>

これに対する BSb の注釈は次のようになっている。

「また主要〔の生氣〕と残りの〔の生氣〕には特徴の違いがある。発声器官等が熟睡している時、ただ主要〔の生氣〕独りが目覚めている。また、そのみが死に襲われない。しかし残り〔の生氣〕は襲われる。またそれ(主要の生氣)だけが、そこ(身体)に安住することと、そこから出発することによって、身体の維持と滅亡の理由となる。器官にはそれがない。また、器官は対象を知覚することの原因であるが、〔主要の〕生氣はそうではない。このような類の数多くの特徴の区別が、生氣と器官の間にある。このようなわけからしても、これらに別の実在たる関係が成立する。」

vailakṣaṇyaṃ ca bhavati mukhyasyetareṣāṃ

ca / supteṣu vāgādiṣu mukhya eko jāgarti

sa eva caiko mṛtyunā anāpta āptāstvitare

/ tasyaiva ca sthityutkrāntibhyāṃ

dehadhāraṇapatanahetutvaṃ nendriyāṇāṃ /

viṣayālocanahetutvaṃ cendriyāṇāṃ na

prāṇasyetyevamjātīyako bhūyāllakṣaṇamedah

prāṇendriyāṇāṃ / tasmādapyeṣāṃ

tatvāntarabhāvasiddhiḥ /<sup>注17)</sup>

ここでは、主要の生氣と残りの生氣(器官)との違いについて述べられている。器官が熟睡している時、主要な生氣は独り目覚めている。また、主要な生氣は死に襲われない。また主要な生氣のみが身体の維持と滅亡の理由となる。さらに、器官は対象を認識するが、主要な生氣はそうではない。このような違いが、両者にあるとされる。

## 小 結

風が、身体に入ると、五つの局面に別れ、特殊の性質で安住しているときに、それは、生氣(プラーナ)と呼ばれるとされる。プラーナは風が身体に入ってから呼称であり、個人の生氣を指す。個人の生氣が出ていこうとした時には、器官が衰弱し、身体が崩壊するので、身体と器官の存立に生氣は欠かせない存在であるとされる。一方、器官が欠けても、その機能が欠けるだけで、生命は維持されるから、生氣と器官は別物とされる。個人の生氣には五つの機能がある。すなわち、前方への機能で、出る息等の作業をする呼気(プラーナ)、後方への機能で、入る息等の作業をする吸気(アパーナ)、両者の接合において存在し、力を要する作業の原因となる媒気(ヴヤーナ)、上方への機能であり、〔死亡時の靈魂の〕出発等の原因である上気(ウダーナ)、身体は一切の支分に、等しく食の精髓を運ぶ等気(サマーナ)である。また、主要な生氣と残りの生氣は微塵であるとされている。理由として、呼気等の五つの機能によって、全身に遍満していることが挙げられている。さらに、器官と主要の生氣が別ものであるとされている。それは、聖典において、生

氣と器官が別々に表示されているからである。また、主要の生氣と残りの生氣(器官)との違いについて述べられている。すなわち、器官が熟睡している時、主要な生氣は独り目覚めており、主要な生氣は死に襲われない。また主要な生氣のみが身体の維持と滅亡の理由となる。さらに、器官は対象を認識するが、主要な生氣はそうではない。このような違いが、両者にあるとされる。

## c) 宇宙的氣息

また、BSb の注釈は次のように述べている。

「《プルシャがこの世界を出ていくとき、彼はヴァーユに到着する。その〔ヴァーユ〕は、彼のために、あたかも車輪の穴の如き〔穴〕をそこにあける。それによりて彼は上昇す。彼は太陽に到着す》(ブリハド 5・10・1) というのがそれである。」

‘yadā vai puruṣo asmāllōkātpraitī sa vāyumāgacchati tasmai sa tatra vijihīte yathā rathacakrasya khaṃ tena sa ūrdhvamātramate sa ādityamāgacchati’ (br 5/10/1) iti /<sup>注18)</sup>

さらに、BSb の注釈は次のように述べている。

「《月(六ヶ月、半年)より〔プルシャは〕神の世界に〔達す〕、神の世界より太陽〔の世界〕に》(ブリハド 6・2・15) と朗唱する。この場合に、太陽が〔ヴァーユに〕つづいて到達される〔ことを確実にする〕ために神の世界から〔プルシャが〕ヴァーユに入ると〔理解〕すべきであろう。」

‘māsebhyo devalokaṃ devalokādādityam’ (br 6-2/15) iti samāmananti / tatrādityānantaryāya devalokādvāyumābhisaṃbhaveyuh /<sup>注19)</sup>

ここでは、宇宙的氣息たる風(ヴァーユ)が、プルシャのために、車輪の穴如き穴をあけ、プルシャはそこを通過して、太陽に達するとされる。プルシャはヴァーユに達して、さらに太陽に到達するとされる。

また、BSb では次のように述べている。

「〔論者の主張〕広く知られているように、生氣とは五種にはたらく風である。また、まさに広く知られていることから、金剛杵は稲妻であろう。そしてこれは風の偉大がのべられているのである。どうしてか。この一切の世界は、生氣と名付けられる。五つにはたらく風に安住して、動揺する。またまさに風にもとづいて、大いに恐るべき金剛杵が、振りかざされる。何となれば、風が雨雲の状態で回転する時、電光、電鳴、雨、稲妻が回転すると人々は語るからである。また、風の認識から、まさしくここに不死たることがある。即ち、《ヴァーユ(風神)はまさに個物なり。ヴァーユは全体なり。かく知る者は再死に打ち勝つ》(ブリハド 3・3・2) と他の聖典に説かれているからである。このようなわけで、ここで、これ〔即ち生氣〕は風であると承認されねばならない。

〔ヴェーダーンタ派の答破〕以上のように提言されたので、我々は〔次のように〕答える。— ここでは、これはまさにブラフマンと承認されねば

ならない。」  
 tāvatprasiddhheḥ pañcavṛttivāyuh prāṇa iti /  
 prasiddhereva cāsnirvajram syāt /  
 vāyoścedaṃ mahātmyaṃ saṃkīrtiyate / katham?  
 sarvamiḍaṃ jagatpañcavṛttau vāyau prāṇa-  
 śabdite pratiṣṭhāyijati / vāyunimittameva  
 ca mahattbhayānakam vajramudyamiyate /  
 vāyau hi parjanyabhāvena vivartamāne  
 vidyutstanayitnuvṛṣṭyaśanayo vivartanta  
 isvācaksate / vāyuvijñānādeva  
 cedamamṛtatvam / tathā hi śrutyantaram-  
 vāyureva vyaṣṭirvāyuh samaṣṭirapa punar  
 mṛtyuṃ jayati ya evaṃ veda' iti /  
 tasmātvāyurayamiha pratipattavya iti /  
 evaṃ prāpte brūmah -- brahmaivedamiha  
 pratipattavyam /<sup>注20)</sup>

ここでは、論者の主張として、生気が五種にはたらく風であることや、この一切の世界が、生気と名付けられ、五つにはたらく風に安住して、動揺し、風にもとづいて、大いに恐るべき金剛杵が、振りかざされること、すなわち、風が雨雲の状態で回転する時、電光、電鳴、雨、稲妻が回転すると人々は語るとされている。また、聖典が引用され、「ヴァーユ（風神）はまさに個物なり。ヴァーユは全体なり。かく知る者は再死に打ち勝つ」との言及が示されている。これを受けて、ヴェーダーンタ派の答として、この風（ヴァーユ）がブラフマンであると承認されると言う。ここで、風はブラフマンそのものと解される。

## 2. シャンカラパーシュヤのプラーナ説とチャラカ・サンヒターの説との比較研究

BSb では器官を意味する生気が説かれている。この生気が、ブラフマン（最高我）から生ずるとされている。すなわち、空、風、火、水、地がブラフマンから生じるように、生気もブラフマンから生じると言う。そしてこの生気は十一の器官、すなわち、五つの知覚器官、五つの作業器官、そして意を意味する。

また、すべての生気に差別がなく、ブラフマンの変異であるとされている。また、器官を伴う意（マナス）とは別に生気が説かれており、生気が風でも作具の作業でもないことが、示されている。その理由として、聖典のなかに、風と別個に教示されている箇所や作具の機能とは別個に教示されている箇所があることを上げられる。

一方、CS には、生気（プラーナ）を器官と明言するような説明は見られない。

また、BSb では風が、身体に入って、五つの局面に別れ、特殊の性質で安住しているときに、それは、生気（プラーナ）と呼ばれるとされる。プラーナは風が身体に入ってからの呼称であり、個人の生気を指す。個人の生気が出ていこうとした時には、器官が衰弱し、身体が崩壊するので、身体と器官の存立に生気は欠かせない存在であるとされる。一方、器官が欠けても、その機能が欠けるだけで、生命は維持されるから、生気と器官は別物とされる。

さらに、個人の生気には五つの機能があるとされる。

すなわち、前方への機能で、出る息等の作業をする呼気（プラーナ）、後方への機能で、入る息等の作業をする吸気（アパーナ）、両者の接合において存在し、力を要する作業の原因となる媒気（ヴァーナ）、上方への機能であり、〔死亡時の靈魂の〕出発等の原因である上気（ウダーナ）、身体は一切の支分に、等しく食の精髓を運ぶ等気（サマーナ）である。

また、主要な生気と残りの生気は微塵であるとされている。理由として、呼気等の五つの機能によって、全身に遍満していることが挙げられている。さらに、器官と主要な生気が別ものであるとされている。それは、聖典において、生気と器官が別々に表示されているからである。

さらに、主要な生気と残りの生気（器官）との違いについて述べられている。すなわち、器官が熟睡している時、主要な生気は独り目覚めており、主要な生気は死に襲われない。また主要な生気のみが身体の維持と滅亡の理由となる。さらに、器官は対象を認識するが、主要な生気はそうではない。このような違いが、両者にあるとされる。

一方、CS では、風（ヴァータ・ヴァーユ）は基本的な元素であることは同じであり、乾燥・軽さ等によって、増大し、湿り・重さ等によって減少するとされ、風の性質ではなく、風を増大させたり、減少させたりする外的要因について述べられている。また、風はプラーナ、ウダーナ、ヴィヤーナ、アパーナの四種からなり、身体を保持するものとされる。この説明は BSb の個人の生気の説明に類似している。<sup>注21)</sup>

次に、CS では、正常な状態にある風がマナスを制御し、全ての感官を活動させ、全ての感覚の対象を認識主体に運ぶとする。これは、BSb で、生気は微塵である理由として、呼気等の五つの機能によって、全身に遍満しているとする考え方と類似しているが、風がマナスを制御するという説は見られない。

また、CS では、風は、身体のさまざまな機能を有効に働かせ、病気から守り、生命を保つ生命維持の原因とされる。これは、BSb で、主要な生気のみが身体の維持と滅亡の理由となるとする考え方に類似している。<sup>注22)</sup>

そして、CS では、医学的な言及が見られる。病気等の原因となる突然激化する風に医者は対処しなければならず、また、風を賞賛することは、体力の増進や寿命を延ばすのに役に立つとされる。<sup>注23)</sup> このような言及は、BSb には見られない。これは医学書特有の見解と考えられる。

BSb では、CS が説くようには太陽や月、星の運行を含めた、宇宙の運動変化をもたらすものとしての風は想定していないが、風あるいは風神がブラフマンそのものと解されている箇所があり、風がブラフマンそのものであれば、CS が説く風の、太陽や月、星の運行を含めた、宇宙の運動変化に対する働きは、ブラフマンに帰することができるものである。<sup>注24)</sup>

## 結 論

BSb では、生氣は十一の器官、すなわち、五つの知覚器官、五つの作業器官、そして意を意味する。

一方、CS には、生氣（プラナーナ）を器官と明言するような説明は見られない。

また、BSb では風が、身体に入って、生氣（プラナーナ）と呼ばれるとされる。プラナーナは風が身体に入ってから呼称であり、個人の生氣を指す。この個人の生氣には五つの機能があり、それぞれ、プラナーナ、アパーナ、ヴァヤーナ、ウダーナ、サマーナと呼ばれる。

また、個人の生氣が出ていこうとした時には、器官が衰弱し、身体が崩壊するので、身体と器官の存立に生氣は欠かせない存在であるとされる。一方、器官が欠けても、その機能が欠けるだけで、生命は維持されるから、生氣と器官は別物とされる。

また、主要な生氣と残りの生氣は微塵であるとされている。理由として、呼気等の五つの機能によって、全身に遍満していることが挙げられている。

一方、CS では、風（ヴァータ・ヴァーユ）はプラナーナ、ウダーナ、ヴィヤーナ、アパーナからなり、身体を保持するものとされる。これは BSb の個人の生氣に類似している。<sup>注23)</sup>次に、CS では、正常な状態にある風がマナスを制御し、全ての感官を活動させ、全ての感覚の対象を認識主体に運ぶとされる。これは、BSb の、生氣は微塵である理由として、呼気等の五つの機能によって、全身に遍満しているとする考え方と類似しているが、風がマナスを制御するという説は見られない。また、CS では、風は、身体のださまざまな機能を有効に働かせ、病気から守り、生命を保つ生命維持の原因とされる。これは、BSb の、主要な生氣のみが身体の維持と滅亡の理由となるとする考え方に類似している。

そして、CS では、病気等の原因となる突然激化する風に医者は対処しなければならず、また、風を賞賛することは、体力の増進や寿命を延ばすのに役に立つとされる。<sup>注25)</sup>このような言は、BSb には見られない。これは医学書特有の見解と考えられる。

また、BSb では、CS が説く、宇宙の運動変化をもたらすものとしての風は想定していないが、風あるいは風神がブラフマンそのものと解されている箇所があり、風がブラフマンそのものであれば、CS が説く風の太陽や月、星の運行を含めた、宇宙の運動変化に対する働きは、ブラフマンに帰することができる。

## 摘 要

CS には、BSb のように器官を意味する生氣（プラナーナ）についての言及は見られないが、個人の生氣については、ほぼ BSb と共通する見解が見られる。また、CS が説く風の太陽や月、星の運行を含めた、宇宙の運動変化に対する働きは、BSb には見られないが、BSb の説く宇宙的生氣である風神はブラフマンそのものとされるため、CS の説くこのような働きは、BSb ではブラフマンたる風神に帰することができる。

しかし、CS では、病気等の原因となる突然激化する風に医者は対処すべきであり、風を賞賛することは、体力の増進や寿命を延ばすのに役に立つとされるが、このような医学書特有の見解は、BSb には見られない。

## 注 記

- 1) BSb Brahmasūtraśāṅkarabhāṣya edited with special references from Ratnaprabhā Nyāyanirṇaya etc. by K.L.Joshi Parimal Publications Vol.1, 2 Parimal Sanskrit Series No.1 1996
- 2) BSb ad BS 2.4.1 BSb Vol.2 p.629 1.9 ~ p.630 1.1 金倉円照 『シャンカラの哲学』下 p.35 1.13
- 3) BSb ad BS 2.4.1 BSb p.630 11.12-16 金倉上掲書下 p.101 1.3
- 4) BSb ad BS 2.4.6 BSb Vol.2 p.635 11.5-17 金倉上掲書下 p.112 1.16 ~ p.113 1.18
- 5) BSb ad BS 2.4.8. BSb Vol.2 p.638 11.1-3 金倉上掲書下 p.118 1.40
- 6) BS 2.4.9 金倉上掲書下 p.120 1.4 長友泰潤 「BSb のマナス説」南九州大学研究報告・第36号 (B) 平成18年4月 p.12 参照.
- 7) BSb ad BS 2.4.9 金倉上掲書下 p.120 1.14 長友上掲論文 p.12 参照.
- 8) BSb ad BS 2.4.9 金倉上掲書下 p.122 1.6 長友上掲論文 p.13 参照.
- 9) BSb ad BS 2.4.11 金倉上掲書下 p.125 1.1 長友上掲論文 p.16 参照.
- 10) BS 2.4.12 金倉上掲書下 p.126 1.1 長友上掲論文 p.16 参照.
- 11) BSb ad BS 2.4.12 金倉上掲書下 p.126 1.3 長友上掲論文 p.16 参照.
- 12) BS 2.4.13 BSb Vol.2 p.642 1.11 金倉上掲書下 p.127 1.9
- 13) BSb ad BS 2.4.13 BSb Vol.2 p.642 11.12-14 金倉上掲書下 p.127 1.10
- 14) BS 2.4.17 BSb Vol.2 p.646 1.1 金倉上掲書下 p.132 1.13-14
- 15) BSb ad BS 2.4.17 BSb Vol.2 p.647 11.4-7 金倉上掲書下 p.133 1.13-17
- 16) BS 2.4.19 BSb Vol.2 p.648 11.7 金倉上掲書下 p.135 1.2
- 17) BSb ad 2.4.19 BSb Vol.2 p.648 11.8-11 金倉上掲書下 p.135 11.3-8
- 18) BSb ad BS 4.3.2 BSb Vol.2 p.988 11.10-11 金倉上掲書下 p.553 1.14-16
- 19) BSb ad BS 4.3.2 BSb Vol.2 p.989 11.4-5 金倉上掲

書下 p.554 1.12-15

63年, 朝日出版 pp.84-85 参照.

20) BSb ad BS 1.3.39 BSb Vol.1 p.359 1.7 ~ p.360 1.3  
倉上掲書上 p.281 11.5-14

22) CS., p237.II.15-20.p.237., 1.35 ~ p.238., 1.3 矢  
野上掲書 pp.85-86 参照.

21) Carakasamhita (以下 CS) ed by V.Bh.Sharma, Chowk  
hamba Sanskrit Studies, Varanasi 1988 VOL.XCIV.  
Vol. I., p.236., 1110-16. p.237., 1115-20 矢野道  
雄『インド医学概論』(科学の名著第II期)昭和

23) CS., p.240., 1.20-23 矢野上掲書 p.86 参照.

24) CS., p.238., 1.11-15 矢野上掲書 p.86 参照.